



# 賢く 優しく 逞しく

9月号・令和5年8月29日発行

本校URL <http://musashimurayama.ed.jp/mmced5c/> 武蔵村山市立第五中学校

## 助け合い、共に生きる

校長 榎戸 千代子

残暑厳しい日が続いています。8月下旬から9月上旬のこの時期は、二十四節気の「処暑」にあたります。「処」は、止まるという意味が込められ、「暑さが終わる頃」とされています。暦の上では、秋らしくなってくる頃ですが、この先もしばらくは暑さが続きそうです。

新学期が始まりました。生徒の皆さんは生活リズムを整え、体調管理に努めてください。様々なことに挑戦し、実りある2学期にしましょう。



8月6日、9日に広島、長崎では、78回目の原爆忌を迎えました。全国の被爆者（被爆者健康手帳所持者）は、3月末現在11万3649人、平均年齢は85.01歳。10年前より、約8万8000人減ったそうです。被爆者の高齢化が進み、戦争を知らない世代が増えています。

広島や長崎だけでなく、戦争当時の庶民の暮らしはどうだったのか、身近なところで若い世代に語り継いでいく必要があるのではないかと思います。戦時中一家を支えていたのは女性で、生前羽村に住んでいた母は、朝早くから夜遅くまで農作業や養蚕、機織りなど、過酷な長時間労働をしていたと語っていました。当時はどこも食糧難で生きること必死だったと思います。農家の母は、都会から食べ物を求め大きな籠を背負ってやってきた女性の、着物と収穫した野菜を物々交換していたという話も聞きました。苦しい中でも人々は共に助け合って生きてきたのだと思います。

本市では、今年度から各学校で「まちづくり学習」を行っています。祖父母をはじめ、戦争時代のことを知っている人がいたら、ぜひ当時の様子を伺ってみてください。武蔵村山市も、人々が助け合って地域を発展させてきた歴史があるはずです。戦後の暮らしは豊かで便利になりましたが、この先、モノレールが開通する将来、さらにどんな武蔵村山市を思い描くのか、過去の人々の暮らしから子供たちに未来を考えさせていくことも大事な「まちづくり学習」だと思います。

また、今年「関東大震災」からちょうど100年目にあたります。大正12（1923）年9月1日午前11時58分、神奈川県西部を震源とするマグニチュード7.9の地震が起き、激しい揺れによる建物の倒壊や津波、土砂災害、大規模な火災が発生して、10万人以上の方の尊い命が失われました。その後も、阪神淡路大震災（平成7年）、東日本大震災（平成23年）をはじめ、大きな地震が各地で起き、首都圏でも近いうちに起こるのではないかとされています。

自分の身は自分で守る「自助」とともに、周りの人も共に助ける「共助」も重要となってきます。地震はいつ起こるか分かりません。命を守るために学校だけでなく、自宅や外出先など様々な場所を想定してどのような行動を取ったらよいかを考えておくことが大切です。地震ではまず、物が「落ちてこない、倒れてこない、移動してこない」空間に身を寄せることが大事な行動になります。学校は、各月の避難訓練や本日の集団下校訓練などを中心に常に緊張感をもって防災教育を進めています。



今年も7月15日の「五中フェスティバル」では、2、3年生の1講座ずつで、北多摩西部消防署の皆様に使水ポンプを使った消火活動やAEDを用いた救急救命の御指導をいただきました。また、東日本大震災のあと、平成25年度には本校の特色の一つである「五中レスキュー隊」ができました。この組織は、防災知識を身に付け、地域防災に貢献しようという思いから当時の2、3年生30名により発足しました。このレスキュー隊は現在も月1回北多摩西部消防署の御指導を受け、応急手当や消火器の操作、避難所設営、AEDの使い方などを学んでいます。いざという時には中学生もボランティアとして頼りになります。災害時には地域で助け合うことの重要性を改めて感じます。過去の戦争や地震から助け合って共に生きることや絆などを考えさせられた夏でした。